的」歴史を取り込むための接点を得るのである。こうして「開発」は歴史観の対立の場から対話の場へと変貌を遂げる。

媒介者としての研究者

むろん遺跡「開発」を避ける方法もあろう。しかし、国家権力と結びつきやすい考古学には、無理な注文かもしれない。国内外を問わず、研究者は、調査許可など国家の統制を受け、出土物のリストや報告書を提出する義務を負う。したがって、「重要な」遺構や遺物の発見があれば、情報は即座に国へ伝わり、その先には保存や観光開発までが待ち受ける。しかも、グローバル化の中で、この事態は、驚異的スピードで進行し、展開するのである。

しかし、「開発」を避けることができないのは、研究者以上に遺跡周辺の地域社会なのである。その意味でも、研究者は、地域社会の「主観的」歴史観をくみ取り、「開発」する側の論理との接合を行っていく作業に積極的に関与していくべきではないだろうか。

関　雄二（せき・ゆうじ）
1979年以来、南米ペルー北高地において神殿の発掘調査を行い、アンデス文明の母体が作り上げられた形成期（前2500～紀元前後）における社会の成立と変容の解明に取り組んでいる。また現在、文化遺産の保全をめぐる地域社会と国家、ユネスコとの関係を問い直す研究を進めており、その一環としてペルー北高地の農村において、遺跡博物館を核とする村落開発、あるいは国際協力事業団が進める観光開発計画策定作業などに携わっている。

毛沢東観光

韓敏
総合研究大学院大学助教授比較文化学専攻／国立民族学博物館助教授

毛沢東の銅像が聳え立つ
韶山村の中央広場

近代中国の礎を築いた毛沢東が亡くなって28年を経た今日、中国では市場経済体制が確立され、自由化が進んでいる。そのなかで毛沢東は過去の存在となっていく一方で、時代の象徴、ナショナリズムのシンボルとして再生されるとともに、救済の神として崇められ、また地域文化の資源として使われるようになってきた。これが1990年代に起こった毛沢東ブームで、その現象は毛の故郷・湖南省韶山を訪れる「毛沢東観光」によく表れている。

人類学が観光を研究テーマとするようになったのは1970年代になってからで、観光客（ゲスト）と観光客を受け入れる地元社会（ホスト）の二つのカテゴリーから観光現象を分析してきた。しかし、行政の力の強い中国の観光を論ずるとき、この二つのカテゴリーだけでは不十分である。そこで私は、ゲスト、ホスト、政府、観光エージェンシーの四つのカテゴリーから毛沢東観光の仕組みを調べてみた。

湖南省韶山を訪れる国内観光客の数は1991年以降で100万人を超えている。団体客の半数は職場と学校の企画できた人たちで、ここで愛国主義の教育を受ける。個人客は、農民、労働者、商人、解放軍、公務員など、さまざまな職業・階層の人たちである。知識人や学生は、毛沢東が農民として成長した環境を見ながら、国家主席になるまでの足跡をたどることができる。労働者、農民、商人にとっては、韶山は毛沢東という神の聖地である。清明節や正月、誕生日、忌日には、中央広場の毛の銅像に供え物をして爆竹を鳴らし、その加護に感謝し、また来る年の幸福を祈る。

韶山村の人口7000人のうち8割は毛氏一族である。村人は毛沢東を村興しの資源とするため、写真や遺物を利用してさまざまな毛グッズを開発した。そして政治家・思想家としての一面だけではなく、詩人、書家、温情家としての人間毛沢東像、一族・親族との絆を効果的に演出している。観光スポットのところどころでは毛の肉声の講演テープが流れていたり、文革の流行歌が響き、タイムスリップした空間がつくられている。ここで中高年の客は過ぎた時代のノスタルジアを感じるであろう。若い客は異文化として体験するであろう。

政府は近年、韶山の毛記念館を愛国主義教育示範基地に指定した。そのため、100近くの高等教育機関と社会団体がここを徳育教育基地として利用している。毛の愛国者としてのイメージを強調し、現政権への求心力のシンボルにしているのである。

韶山は山紫水明の地でもある。そこで観光エージェンシーは、「偉人の故郷」「風水宝地」「人傑地霊」（地中の霊気によって潔出の人間が育つ）、あるいは湖南文化を強調した「湖南――有名人の産地」といった謳い文句で客を集めている。

このように毛沢東観光は観光客、ホスト社会、政府、観光エージェンシーの相互作用によって複合的にできたもので、国内のあらゆる階層を巻き込んでいる。人々はそれぞれのニーズにそって毛の意味を転化し、自分たちの毛沢東像をつくりあげている。今後、それがどう転化するのかは、民衆と社会、政府が毛のパワーをどのように利用するかよって変わってくるであろう。